あたまの端っこに残っているありきたりな記憶。
ふとした時に思い出す。それを今思い出した。
父の葬儀中だった。

記憶の映像は浴衣姿の父と母、父は大好きな日本酒を飲んで笑って母はその隣で笑ってる。音の無い８ｍｍフィルムの映像みたいな記憶だ。
父はお酒を飲む時が一番楽しそうだった。だけどそのせいで肝臓を悪くしてしまった。こうなってしまえば、私も付き合って一緒に飲んであげればよかったと後悔が残る。
私にはお酒の美味しさが分からない。それを飲むならジュースの方が美味しいし紅茶で十分だから。

父を亡くした私の喪失感と、長年連れ添った伴侶を亡くした母の喪失感では言葉では言い表せない違いがある。私の知らない二人の記憶があって母しか知らない父の姿があったはず。
私より母の方が何倍も辛いはずだから涙は我慢しよう。そう思うと一度も泣けなくなってしまった。参列者には心無い娘と思われたかもしれないが元々泣くタイプでもない。
葬儀の日の夜、落ち着いた後で母に記憶の話をしてみた。
「昔３人で旅館に行ったよね？ほとんど記憶ないんだけど。父さんがお酒を飲んで母さんが笑ってる記憶があるんだ」
母はゆっくりと私の方に体を向けて涙を拭いてから笑顔を見せる。
私と母は、リビングのソファに並んで座っていた。
テレビもつけずに父のいない静かな家を感じていた。
「いつの記憶だろうね。旅館はたまに行ったけれど……。あの人美味しい日本酒が飲みたいって高い旅館をわざわざ予約してたのよ。私は安いところでいいって言ってたのに」と母は少し元気な声が出始める。
「あの場所はどこなのかなって、ずっと気になってて」
すると母は立ち上がって、ちょっと待ってなさいと言い、自分の部屋に戻って行く。そしてガタゴトと音がすると沢山のアルバムを抱えて戻ってきた。
「写真があるはずよ。あの人撮りたがりだから」
アルバムは表紙にテプラで何年から何年と分類されていた。母の性格が出ているなと思った。「あの人写真撮るばかりで整理はしないから」と１冊目のアルバムを開く。一番古いものだった。

それはまだ私が生まれる前の母の写真で、若いころの母は私に似ていてなぜか安心した気持ちになった。

若いころの父はオールバックにサングラスをかけた写真ばかりで昔はスリムだったんだと驚いた。なぜか母とのツーショットで笑ってる写真は１枚もない。

「父さん、笑ってないね」

「あの人撮るのは好きだけど、撮られるのは嫌いだから」

私が生まれてからの写真で父が写っているものは少なかった。父がいつもカメラマンで母と私を撮っていたから。

アルバムをめくっていると浴衣で映った母の写真が出てきた。記憶の中の浴衣とよく似ていて指を指して聞いた。

「これはどこの旅館？」

これはあそこよ、と名前を聞いてもピンとこなかった。その隣に私の写真もあった。小さな私がニコニコの笑顔で徳利を持っている写真だ。

「これ何してるの？」

「あなたがお父さんに注ぐってお酌をしようとしてるところよ。この後こぼしちゃって、もう大変だったんだから」

「覚えてないな……」

「この時のお父さん引きつった顔してたの覚えてるわ。楽しみにしてた日本酒無くなっちゃって」と母さんは思い出してクスリと笑う。

ここに行けば父とお酒を交わせそうな気がした。そんなわけはないのに、この場所に行ってみたくなった。

「私ここに行ってくる」

母を誘ったがまだやることが沢山あると断られてしまった。旅館の前で撮った写真から場所を特定して次の休みに予約をした。

到着した温泉駅は全く見覚えが無くて、ここで合っているのか不安になった。旅館まで少し歩くけれど、特に予定も無いからとキャリーを転がしながらゆっくり向かった。

温泉街の街並みは旅行に来たって感覚を一気に沸せてくれる。

旅館に到着すると丁寧に部屋を案内された。

女一人で旅館に来ると恋人に振られた傷心旅行とでも思われそうで仲居さんの顔を直視できない。父を亡くしての旅行だから傷心旅行で間違いないのだけれど。

料理は何時にお持ちしますかと聞かれて１８時頃と答えた。それ

まで時間があるからのんびり温泉を楽しんだ。
とてもいい湯、それに尽きた。
食事までお洒落に浴衣で読書でもしようかと、持ってきた本はスマホの誘惑に負けて開けなかった。布団に飛び込んで寝っ転がる。
しばらくすると料理が運ばれてきた。
「すみません、お猪口をもう一ついただけますか」
仲居さんは清らかな笑顔でもう一つ持ってきてくれた。それではごゆっくりと一人になると私はさっそく徳利を手にしてお猪口に注いだ。
トクトクトクと。今度はこぼさないように。
綺麗に透き通った日本酒。お猪口の底の青い円と目が合う。

乾杯、と父さんに。

透き通る日本酒は、口から喉を通って胃の中へ。
冷たさが流れ込んで消えていく。

そして消えたはずの日本酒が温泉みたいに湧きでてくる。
父さんは笑った気がした。